クス．月刊地球，**4**, 15–22.
小出　仁・浜島良吉・川井忠彦(1987)：マグマ貫入による地殻変動の解析とその噴火への応用．第7回岩の力学シンポジウム講演論文集，479–484.
茂木清夫(1957)：桜島の噴火と周辺の地殻変動との関係．火山，第2集，**1**, 9–18.
茂木清夫(1974)：火山と深部の割れ目．地団研専報/**18**, 83–84.
中田節也・清水　洋(1992)：普賢岳のマグマ活動．科学，**62**, 554–561.
岡田義光・山本英二(1991)：地殻変動より見た1989年伊東沖の地震・火山活動．月刊地球，**11**, 95–102.
小野晃司(1990)：火山の長期予測．火山，第2集，**34**, S201–S214.
斉藤英二・渡辺和明・須藤　茂・星住英夫・遠藤秀典(1991a)：雲仙，普賢岳の光波測距(速報)．地質ニュース，443号，67.
斉藤英二・渡辺和明・須藤　茂・星住英夫・遠藤秀典・風早康平・川邊禎久・高田　亮・阪口圭一・宝田晋治・山元孝広(1991b)：雲仙，普賢岳の光波測距．地質ニュース，444号，63–66.
斉藤英二・渡辺和明・須藤　茂・星住英夫・遠藤秀典(1991c)：光波測距による普賢岳の山体変動の測定．日本リモートセンシング学会誌，**11**, 57–60.
曽屋龍典(1987)：伊豆大島火山の火山活動と噴火予測．噴火予知連絡会会報，**38**, 21–25.
多田　堯・橋本　学(1987)：1986年伊豆大島噴火と地殻変動．月刊地球，**9**, 396–403.
高田　亮(1991)：マグマで満たされたクラックの輸送過程からみた火山の形成・発展機構．月刊地球，**13**, 332–340.
玉生志郎(1991)：ニュージーランドホワイト島の火山活動と科学掘削計画について．地質ニュース，no. 438, 52–56.
安田　聡・須藤　茂・遠藤秀典(1991)：空中写真を用いた雲仙・普賢岳周辺の火山活動に伴う地形変動の計測．日本リモートセンシング学会誌，**11**, 61–64.
渡辺　了・熊沢峰夫・栗田　敬・増田忠志(1992)：部分溶融体の変形実験—実験装置の開発—．地震，第2輯，**45**, 187–198.

KOIDE Hitoshi (1993): Dynamics of magma and prediction of volcanic eruptions.

新刊紹介

富士山　その自然のすべて

諏訪　彰編集，同文書院，1992年11月20日発行
B5判 355頁，6500円（税込み）

古来より日本人に親しまれてきた富士山は，一方で災害ももたらしてきた活火山である．宝永の噴火(1707年)のような大噴火がまた起これば，現代社会に与える影響は計り知れない．将来予想される噴火災害を最小限に防ぎ，無謀な“開発”から自然環境を守るためには，富士山の観測・研究を進めると共に，その科学的知識を広く市民的な共通認識としていく必要がある．このような基本的視点から，本書は，「その自然のすべて」という副題にあるように，地質や地下水だけでなく気象や動植物についても重点を置き，富士火山の生い立ちと現在を総合的に解説している．

主な項目(表題は略記)と執筆者(括弧内)は以下の通りである．

1) 富士火山を診断(諏訪　彰)
2) 噴火の古記録(伊藤和明)
3) 富士山の生い立ちとテフラ(町田　洋)
4) 富士山地域の化石(西宮克彦)
5) 富士山の溶岩(濱野一彦)
6) 富士火山噴出物の化学成分(倉沢　一)
7) 富士五湖の変遷(濱野一彦)
8) 富士山麓の湧き水(山本荘毅)
9) 富士山の地下水(土　隆一)
10) 富士山頂の特異な気象(中島　博)
11) 富士山の植物(宮脇　昭・菅原久夫)
12) 富士山の動物(今泉忠明)

上記の間に置かれた11項目の記事(3–10頁)も充実しており，落石事故・乱気流による英国航空機事故・景観工学的富士山像など，社会と富士山との様々な関わりが描かれている．随所にはさまれた写真と図は，内容の理解を助けているだけでなく，富士山を身近なものに感じさせてくれる．いくつかのカラー写真は，もっと大きく印刷していればと惜しまれる程にすばらしい．また，各頁に余白をつくって「モグラ戦争の最前線」という様な見出しを印刷している点もユニークで，編者と出版社の苦心のあとがうかがえる．

これから富士山を訪れる人のために，溶岩洞穴などの天然紀念物(本誌1992年5月号参照)，簡単に観察できる露頭，さらにはビジターセンターなどを紹介する項あるいは別添え地図があれば，本書はガイドブックとしてもより多くの読者を得られるのではなかろうか．また，富士山について更に知りたい人のために，市民向けの代表的な解説書を整理した頁が，巻末にあっても良かったと思われる．

（地質ニュース編集委員会　佐藤興平）